

視覚障害を持つ学生に対する TOEIC 受験対策

太田智加子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

概要

本論文では、特に近年、就職、進学対策として需要の高まりを見せる TOEIC を受験する際に視覚障害学生が抱える困難と、今回、筆者がそうした困難にどのように対処しながら本学初の TOEIC IP 実施に至ったかを報告する。そして、まだ視覚障害者にとっては十分に門戸が開かれていない TOEIC の現状を提示し、解決すべき課題を考察して、今後、視覚障害者が本来得られるべき公平な受験機会を得られることをめざす一提言とする。

1. はじめにー TOEIC とはー

近年、就職、進学対策として TOEIC (=Test of English for International Communication) の需要が高まっている。

TOEIC は、1979 年に始まった、990 点満点で英語のリスニング力 / リーディング力を測る試験で、年に 8 回の公開テストがある。2007 年からはスピーキング / ライティング試験も始まった。問題を作成しているのは、アメリカの国家試験や資格試験の大半を実施している非営利テスト開発機関 ETS (= Educational Testing Service) である。2011 年の統計では、世界約 120 ヶ国で年間約 500 万人が受験している。

日本で英語の資格試験といえば、1963 年に最初の試験が行われて以来、長く、実用英語技能検定試験（以下「英検」とする）が主流であったが、特にここ 10 年ほどの間に、社員採用の条件や内定者に対する入社までの条件、入社後の昇進の条件などとして TOEIC のスコアを求める企業や、TOEIC のスコアに応じて英語

の単位認定をする大学、短期大学、高等専門学校などが増え、社会的な注目度、認知度が高くなってきた。

日本での TOEIC を運営する財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（以下「協会」とする）が最近行ったアンケートによると、「社員採用時に TOEIC のスコアを参考にしている」という企業・団体は、アンケート回答企業・団体のうち約 52%、「将来は考慮したい」という企業・団体を合わせると約 74% であった。すでに TOEIC を導入している企業・団体は、日本を代表するメーカー、金融、運輸など 1,900 社にのぼる（注 1）。

表 1 英検と TOEIC の比較

	英検	TOEIC
受験者数	約 229 万人	約 227 万人
等級・称号	1 級 - 5 級	点数評価式 (10 ~ 990 点)
試験形態	一次：筆記とリスニング 二次：個別面接	Listening 100 問 Part 1： 写真描写問題 Reading 100 問
試験回数	年 3 回	年 9 回

2. TOEIC の視覚障害者特別措置

本学では、2010 年度まで英検を年 3 回実施してきた。しかしながら、特に情報システム学科の学生を中心として、内定取得や就職時までのスコア取得のために TOEIC が求められている状況が認識されてきた。従前に行っていた第 2 回英検は、受験申し込みが夏季休業中であるため受験生が少ない状態が続いてきたこともあり、これを取りやめ、代わりに TOEIC IP (Institutional Program：団体特別受験制度。以

下「TOEIC IP」または「IP テスト」として実施することとした。

筆者は前任校にて TOEIC 対策指導や実施を数多く経験してきたが、視覚障害者の TOEIC 受験については前例を知らなかったため、協会の担当者に来学いただき試験実施に向けた具体策を協議することになった。

学内実施の IP テストは、公開テストと比べて企業等からの信頼度は 80 パーセント程度であり（つまり、結果の信頼性に疑いを持つ機関も存在すること）、実施日時は任意、受験できるのは学内の者だけである。通常は最低 10 名の受験者が必要だが、手数料 2,100 円を納めれば 10 名以下でも実施できるという新しい情報が得られた。視覚障害を持つ受験者は、公開テストでは少数ながらいるものの、IP テストは実施例がないことが分かった。

公開テストにおける視覚障害者特別措置は、以下の通りである。

- (1) 2 倍の拡大文字の試験問題が準備される。
- (2) 正答を○で囲むタイプの、4 種類の文字の大きさの解答用紙から見やすいものを選択できる。
- (3) ルーペ、拡大読書器、携帯型電子ルーペなどの情報補償機器は事前に申請すれば使用できる。

(1) については、TOEIC はもともと問題の文字が非常に小さく、視覚障害者にとっては 2 倍の拡大文字でも困難を抱えるであろうことが予想される。ただ、それ以上文字を拡大すると問題用紙が非常に大きくなってしまい、紙の扱いに困る。また、文字を拡大すればするほど 1 ページあたりの文字数が少なくなるため、「長文問題等で数ページ前に戻ったりすると、そのうちどこを読んでいるのか分からなくなる」という声がよく聞かれる。特に拡大読書器やルーペを用いる視覚障害者は、スクリーン上で読むことのできる文字数、1 度に視野に入ってくる文字数がさらに少なくなるため、この困難を抱えやすい。

(2) については、視覚障害者がマークシート用紙で解答するのは困難で、正答できていてもマークミスによって本来の実力より低い点数

を取ってしまう可能性が大きいため、このような解答用紙の特別措置があることには安堵した。

公開テストでは現在のところ、点字受験も時間延長措置も行われていないため、点字による一般受験者は受験の機会を得られず、重度の視覚障害者にとっても実力を出し切れないと思われる状況であることが分かった。

視覚障害者の IP テスト実施は、本学春日キャンパスが日本で初めての例であり、特別措置についてのさまざまな協議が必要となり、決定までに長時間を要した。

協会から示されたのは、視覚障害の程度を証明する診断書を提出したうえで以下のような特別措置であった。

- (1) 2 倍の拡大文字の試験問題が準備される。
- (2) 正答を○で囲むタイプの、4 種類の文字の大きさの解答用紙から見やすいものを選択できる。
- (3) ルーペ、拡大読書器、携帯型電子ルーペなどの情報補償機器は事前に申請しなくとも使用できる。
- (4) 点字受験可能。
- (5) 通常の 1.5 倍 / 2 倍の 2 種類の時間延長措置が可能。

(1)、(2) は公開テストにおける特別措置と同じで、(3) ~ (5) が IP テストでのみ認められる特別措置である。

(1) については、公開テストに関して既述の通り、2 倍の拡大文字でも視覚障害者にとっては不十分と思われるが、現状ではやむを得ないため、受験希望者に試験問題のサンプルを見せたくて、受験の意志を再確認した。(2) については、受験者各人に希望する解答用紙を選択してもらった。

もっとも困難をきわめたのは、(5) の時間延長措置についてである。どの受験者がそれぞれ 1.5 倍 / 2 倍の延長措置に該当するのかを誰がどのような基準で決定するのか、協会も英語教員も知識を持ち合わせていなかった。視覚障害と読解速度に関する研究論文、眼科医への照会、TOEIC 問題の作成機関である ETS への照会などをしたものの、明確な基準を得ること

は困難であった。しかし今回は初回のため、まずは試行的に全員2倍で実施することとなった。

3. 試験の実施

2倍の試験時間延長措置で行うIPテストは、約4時間という長時間の試験となる。受験者は4名であったが、まずは受験者全員と試験監督者の空き時間が4時間以上ある日時の調整が必要となり、受験者の学年がさまざままで空き時間が一様でないこともあって、平日は昼間、夜間ともに実施が難しく、祝日の実施となった。

視覚障害者特別措置による受験は、受験者確定から実施までに最低1ヶ月を要する。これは、時間延長版CDの作成に約1ヶ月要するためである。

このように視覚障害者のTOEIC受験には、公開テスト、IPテストともにまだまださまざまな困難が伴うが、今回、全国初のIPテスト実施に辿り着いたことにはまず大きな意義を見いだしたい。

4. 受験者の感想

2011年度は4名の受験者があった。以下、受験者の感想を抜粋して記す。

- 多様な書体で使用されていると見づらいことがある。
- 拡大読書器を使用するので問題用紙の大きさがなるべく小さい方が良い。
- 全ての問題文や設問の文頭が揃っていないので、途中で設問を見失うことがあった。(Eメールや広告文の問題などでタイトルが中央に来ていたり、「Part 6長文穴埋め問題」で設問が文中にあることなどを指す。)

筆者は普段、講義用資料はすべてテキストファイルで渡し、学生は各自が見やすい形態に印刷して講義に持参している。このことから考えると、問題文に使用されている多様な書体やポイント数、文字の装飾などは、視覚障害者にとって解答に支障をきたすことが容易に想像される。

学生の意見は協会に伝え、今後視覚障害者の

受験環境がより改善されるよう働きかけている途上である。

5. 今後の課題

今回、日本初のTOEIC IPテスト実施が実現したことは大変意義あることである。

しかし、今後の課題も残った。特にこれから解決していかねばならない点が、以下の通りまだいくつかある。

(1) 公開テストでの視覚障害者特別措置の早急な実現に向けた働きかけ

IPテストは、実施している学校や団体に所属している者でないと受験資格がないため、最終学校を卒業後は、勤務先がIPテストを実施していない限り、受験不可能である。

(2) 写真描写問題の扱い

写真が見えない受験者は写真描写問題を解答できない。英検では、視覚障害者特別措置が明文化されており、写真描写問題については、正答に支障のない範囲で写真の内容について日本語の説明がつくが、TOEICにはこのような措置はない。



図1 TOEICの写真描写問題

(3) 時間延長措置の根拠の明確化

1.5倍 / 2倍の2種類の時間延長措置はどのような根拠で決められるべきなのか。

とはいえ、本学のHPに掲載された、筆者による聴覚障害学生(天久保キャンパス)対象のTOEIC講座の記事(注2)を見た一般の方から問い合わせがあるなど、今回のTOEIC IP実施への試みには思わぬ反響があった。今後さらに各方面へ働きかけ、視覚障害者の就学・就労・

生活環境改善のために尽力していきたい。

注釈

- (1) Educational Testing Service : TOEIC PROGRAM GUIDE. 3-7, 2011.
- (2) 筑波技術大学 HP 2011 年 10 月 21 日付「ニュース」
http://www.tsukuba-tech.ac.jp/news/hi_2011102101.html